

# キャンパス移転で一層の活性化を期待

名古屋学院大学 理事長

## 伊藤 信義



いとう・のぶよし氏

1956年東京教育大学体育学部卒業。  
コネチカット大学大学院修了後、名古屋市立保育短期大学教授、  
学長を経て学校法人名古屋学院中学・高等学校校長、理事長を  
務める。  
03年8月より、学校法人名古屋学院大学理事長に就任。  
カンサス州立大学客員教授、財団法人名古屋市体育協会会長、  
愛知県体育協会副会長などを歴任。

本学園はこの秋、前身である名古屋英和学校の創立から120周年を迎えました。新約聖書に由来する「敬神愛人」を教育理念とし、キリスト教思想家の内村鑑三も教鞭を執った学園として、今日に至る長い歴史を築いてまいりました。

開学から43年を迎えた名古屋学院大学も、「敬神愛人」という言葉が示すように、心豊かな人間性を育む教育を大切にしながら、大学として「社会に役立つ有能な人材の育成」を目指しております。端的に言えば、「実学」に重点を置く教育の実践が本学の本分といえます。

現在本学では、「実学」を志向したカリキュラム改革を全学規模で進めている最中ですが、目指すレベルにはまだ達していないように私は感じています。無論、社会で役立つことのみを教えることは不可能ですが、できれば半分以上は「実学」と呼べるような内容にしてほしい。そうしなければ、社会から取り残されてしまうのではないかと、ここ1、2年の間、私は強い危機感を抱いております。

### 「何のために大学に入ったのか」を語り合う

私学の経営者としては当然といえますが、私は「定員確保」を経営上の最大の課題と位置付けています。学生が十分に確保されなければ、大学の充実はありません。経営が施設・設備の拡充や教育サービスに消極的になってしまうと、大学は後退を余儀なくされます。だから、定員の確保は絶対なのです。

勉強の好きな学生、スポーツに打ち込む学生、将来の仕事につながるアルバイトに励む学生等々、大学にはさまざまな学生がいたほうがよいだろうと私は考えています。ただし、そうした学生たちを放っておくだけではよくありません。「何のために大学に入ったのか」を学生とよく話し合い、将来に向けた指導を

してほしいと先生方には伝えています。と言いますのも、これはどの大学にも当てはまることかと思いますが、本学にも“不本意”ながら入ってくる学生がいます。彼らは最初にうまく動機付けがなされないと、途中で意欲が萎え、学問に背を向け、留年や退学といった方向に進む危険性が高いといえます。ゆえに、そうした事態に陥らないような方向付けがスタート時点から必要になるのです。したがって、たくさんの学生に集まってもらいながらも個々の学生のケアを欠かさないと、という姿勢を、今以上に本学の基調としていくべきだと思っています。

### 教員と学生のアピールが課題

学生募集という点では、高校生や保護者に学校の中身を理解してもらうのが一番だと思いますが、学校の個性を出すのは非常に難しいというのが今のところの私の実感です。しかしながら、大学としてやるべきことは、ある程度見えてきたような気がしています。

ひとつは、先生方の社会へのアピールです。本学の先生方は、各々の専門分野では秀でていますが、どこか控え目なところがあるようで、マスコミなどに出る機会が少ないように感じています。その点を変えていきたいと思い、私は以前から、もっと先生方を売り出してほしいと要望していますが、まだあまり思うようには進んでいません。

もうひとつは、学生たちの社会へのアピールです。スポーツや社会活動などで、本学の学生たちはもっと社会へアピールできるのではないかと考えていますが、こちらはまだ十分ではありません。本学は学生たちにも少し消極的な傾向があるのかもしれませんが、そうした面は学校側が強引に主導していくよりも、学生が自律的に動き出すようなかたちがいいと考え、その仕組みづくりに着手し始めたところです。最初から学生全員にアプローチするのは難しいので、まずは2割くらい

の学生がリーダーシップを発揮していけるような組織づくりを予定しています。

そしてさらに、地域の人々に大学をもっと使っていただき、親しみを持っていただくことも重要だと考えています。運動施設や図書館を、高校生を始めとする近隣のみなさんに開放することで本学を見に来ていただき、近い将来にこちらで学ぶことを希望してもらえるようになれば、それも望ましいと思っています。

### 表情が明るくなった学生たち

今年の春、本学は4学部中、3学部のキャンパスを移転しました。緑豊かな瀬戸から名古屋市の中心地へと、いわば40年ぶりに都会へ回帰したのです。瀬戸の静かな環境は勉学にはうってつけですが、利便性という点で学生たちの行動範囲を狭めかねず、今後の募集に影響を及ぼしていくことも予想されました。そのため大きな決断を下したのです。当初は学内にも異論がありましたが、いざ移転し、半年が経った今、私は成功だったと思っています。学生たちの表情が明るくなった気がするのです。いろいろな面で行動的になり、学生生活をこれまで以上に満喫できるようになったのではないのでしょうか。おそらく講義の出席率は上っているでしょう。留年や退学の率も、今後は低減していくと思います。これから入ってくる新入生を含め、このキャンパスは年々活性化していくのではないかと私は期待しています。

こうしたキャンパス移転に加え、2年以内に1学部、1学科の増設を計画するなど、本学はここ数年、学校改革を加速させてまいりました。しかし私は、まだまだ満足するには至っておりません。今後の一段と厳しい環境を乗り越えていくには、意思決定において今以上のスピードが求められていくでしょう。その舵取りをしっかりと行っていくことも私の重要な使命と心得ております。